

序 丸山三友教授のこと

その他のタイトル	Vorwort
著者	小川 悟
雑誌名	独逸文学
巻	43
ページ	1-1
発行年	1999-03-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00018160

序

丸山三友教授のこと

小 川 悟

丸山三友教授が定年で、大学を退職される。本学に就職されて、もうどれくらい経つのか。おそらく四十年を超えるのだろうか。それにしても、随分長い年月をご苦労願ったことになる。私は、昭和三十八年に本学にやって来た。その頃は、上道教授を始め内山貞三郎教授、福本教授、中村教授、高尾教授、見次教授といったいわゆる明治生まれの教授たちが、何となく悠々とした雰囲気の中で独特の世界を醸し出していた。若い私などは、これらの教授たちに接する時には、いわゆる三尺下がって師の影を踏まずという恐懼したような気持ちになっていた。今日とはたいへんな違いである。そんな世界の中に、丸山さんがいた。およそシラーの研究者には見えない外観だった。話す時には、あの独特の低音の声で、時々聞き取れないことがあった。明治生まれの教授たちの雛形のような立ち居振舞が、私には印象的だった。

ドイツには、同じ年に行った。シラーの研究だからシュトゥットガルトへ行った。私も行った。フリッツ・マルティーニ教授の許で研究することになった。ここは、当時まことによい町で、私たちはよく勉強もし、よく遊びもした。私たちは、マルティーニやケーテ・ハンブルガーの前で研究発表もした。この二人の有名教授は、私たちのことを褒めてはくれなかった。明治生まれの雛形みたいな丸山さんはビールが好きで、部屋の中はビールの空き瓶で飾られていた。あるドイツ人の画家と私たちは、イタリアに旅をした。イタリアは明るく、丸山さんは満足してカンパーリを飲んでいて。私は、飽きるほどシラーやケーテの話の聞かされた。今ではもう、遠い昔になってしまった。丸山さん、お元気で。